「現代中国語の使役構文の意味研究」
＜博士論文要旨＞

神奈川大学大学院外国語学研究科中国言語文化専攻／横山昌子

1.研究の目的

使役は、話者がある事態をどの視点から捉えたかによって言語上異なる形式が現れるヴォイス（相あるいは態）現象のひとつである。ヴォイスは、接辞を持つ日本語のような言語では形態的対立が文法に反映された文法的事象として捉えられるが、孤立語である中国語には受身や使役のヴォイス形態はない。しかし、ヴォイスを話者の視点が特定の形式に現れる現象として捉えるならば、ヴォイス現象はどの言語にも存在し、中国語にも受動や使役を表わす形式がある。現代中国語の使役形式としては、典型的には“让（叫）”構文、“使”構文、兼語文があるが、「動詞 - 結果補語（VR）複合語」や一部の“得”構文、“把”構文が使役の意味を表すことが指摘されている。このように中国語の使役には統語的に異なる形式が用いられているが、これらが共に使役の概念を表しうるのは、共通の意味構造が存在するからであると推定される。そこで、本論では中国語の使役文を意味の角度から分析し、これらが共通の使役構造を持つことを論証する。

2.考察の対象

現代中国語の使役文としてどのような形式を含めるか、またどのように分類するかは研究者によって意見が異なり共通の認識にはなっていない。范晓(2000)は、使役文として“使”構文、“V 使”構文、一部の“把”構文、使動文、指令文（兼語文）、使成文（動詞 - 結果語構造）、一部の“得”構文の 7 種類の形式を取り上げている。本論では、兼語構造を持つ使役構文として“让”（“叫”）構文、“使”構文、兼語文を取り上げ、「動詞 - 結果補語（VR）」構造を持つ使役構文として VR 構文、“得”構文を取り上げる。本論では VR は統語的構造ではなく複合語として扱う。また、“把”構文も考察の対象に含めるが、本論では“把”構文の文型意味は使役ではなく「モタラス」という広い意味での「授与」とする考えに立脚し、“把”構文の使役義は、意味構造の内部に VR や“得”構文が構成する使役構造を含むために生じることを論理構造で明示する。使役と関係する形式としては、この他に「動詞 - 方向補語」構造、「動詞 - 場所補語」構造、二重目的語文などが指摘されているが、それらについては本論の考察には含めない。

3.研究方法

研究の方法としては、形式意味論の枠組みを用いる。形式意味論はモンタギューが数理論理学の技法を用いて体系化した意味論であり、「モンタギュー意味論」と呼ばれている。モンタギューは、言語の意味は統語的構造のように客観的に規定できないとする考えに対し、真理条件的意味規定、可能世界の概念の導入、モデル理論に基づく方法を用いた明示

的な意味論の方法を示した。形式意味論では、一般に自然言語の表現を直接解釈するのではなく、一旦仲介の形式言語の表現に翻訳し、それを意味規則に従って解釈するという方法が採られる。3～5 章では、形式言語として命題論理（propositional logic）と述語論理（predicate logic）を用いた分析を行う。6 章では、モンタギューが PTQ（'The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English',1973）で体系化した方法に基づき、タイプ理論とλ（ラムダ）演算を含む高階言語（内包論理=IL）を導入した分析を行う。

4.論文構成と各章の内容

本論文は序論と結びを除き、6 章で構成されている。

第 1 章 中国語の使役文の先行研究と本論の捉え方

第 2 章 分析理論－形式意味論の考え方と方法

第 3 章 兼語構造と VR 構造を基盤とした使役文

第 4 章 VR の項整合と意味構造

第 5 章 VR の特徴と論理構造

第 6 章 モンタギュー意味論による使役文の分析

第 1 章では、現代中国語の使役について、本論が参考とした先行研究を取り上げる。第 2 章では、形式意味論の考え方とその方法について述べる。1～3 節では、形式意味論の基礎的な概念について説明し、中国語の例文を用いてモデル意味論的な枠組みにおいて意味が規定される過程を示す。4 節では、本論で用いる論理式について説明する。本論では、一般的な「述語論理」に「談話概念」及び「意味役割」、「時相」の概念を導入した論理式を用いる。第 3 章では、中国語の使役文を、兼語構造を基盤とする使役文と「動詞 - 結果補語（VR）」構造を基盤とする使役文に大別し、それぞれの使役の意味構造を記述する。第 4 章では、袁毓林(2001)が述結式（本論では VR 複合語）の項整合の分析において取り上げた例文について、これらを論理式で表記し、項整合と意味形成の関係を明確にする。第 5 章では、VR 複合語を他動型と自動型に分類し、それぞれについて論理式で表記し考察する。第 6 章では、モンタギュー意味論の枠組みに基づき、“让”構文、“使”構文及び兼語文の分析を行う。具体的な方法としては、モンタギューの PTQ の内包論理（IL）による記述方法を用いる。